

## 市民講座特集

総合テーマ「家政大学は市民生活の質（QOL）向上のために、何ができるか、何をなすべきか」（平成19年12月～20年3月、狭山）

---

### 地域の自然・文化・社会と調和する町づくり、町おこし

手嶋尚人（東京家政大学造形表現学科）

台東区谷中で、これまで 22 年間、まちづくり活動に参加しているという立場で、今日はお話をしたいと思っています。

## ■ 谷中の全体像

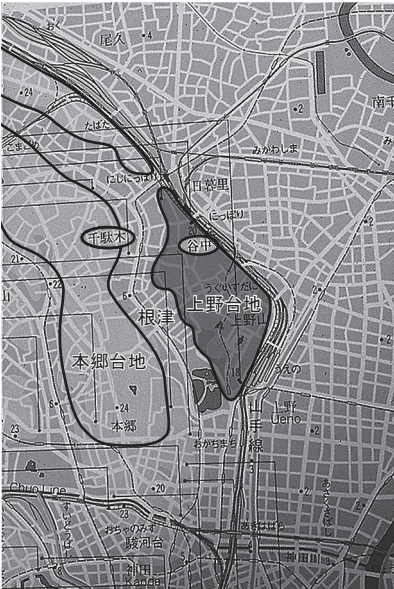
谷根千という言い方で、台東区谷中、文京区根津、千駄木を1エリアとして考えられているエリアです。元々の起源としては、上野に江戸城の鬼門を塞ぐため東叡山寛永寺ができ、その背後地として、谷中は寺町として作られています。

上野公園の外れに東京芸術大学があるのですが、私はそこの出身です。東京芸術大学で、私が大学院のときに、谷中の人たちと連携してまちづくりをやろうというプロジェクトがあり、それに参加したのがきっかけで、それ以来 22 年間、谷中に住み着きまちづくり活動に参加しています。

スライド1：谷中のある上野台地は、関東平野の中で一番東の台地です。江戸城の鬼門を塞ぐという役割と、江戸時代から名所地として、上野の桜から王子の飛鳥山の桜まで、江戸の行楽地になっていたところでもあります。谷中は元々寺町であり名所地ということで、外来者も多く訪れる町だったということが特徴の一つです。お寺さんが、このエリアで76ヶ寺あります。お彼岸の時期は、すごい人数が谷中に集まります。

江戸時代の、これは都市計画でもあるのですが、谷中は日蓮系、浅草

は浄土真宗系と、ある程度宗派を分けて、江戸の市中のことを「御府内」という言い方をするのですけれども、御府内の外れに寺町を配置した。ちょうど谷中が面している荒川区と台東区の境が、江戸の市中の範囲を



スライド 1



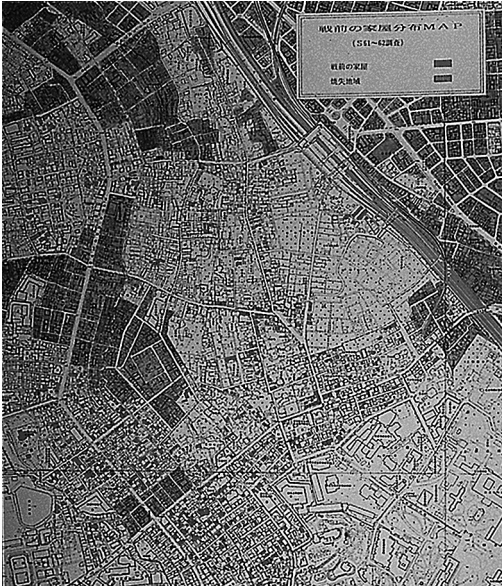
スライド 2

示す朱引線となっています。

スライド2：これは谷中を上から撮った写真なのですが、まちを歩いているとお寺さんというのはそれほど気にならないのですが、上から見ると、本当にお墓だらけというようなところなんです。薄皮まんじゅうのようなもので、薄皮が、人が住んでいるところで、アンコの部分がお墓になっている、そのようなまちだと思ってください。

スライド3：ここは関東大震災のときも戦災のときも、被害の少なかったエリアです。グレーに塗ったところは、焼けたエリアです。赤くプロットしているのが、戦前からの家が残っている部分です。20年前の調査で現在は大部無くなってきていますが。

スライド4：この花屋さんは明治4年創業で、建築的にいえば、「<sup>2</sup>厨<sup>し</sup>2階」という言い方をするのですが、江戸の名残を残している造り方です。明治4年創業ということなので、そのときに造られたものかと思います。



スライド 3



このように井戸が残っていたりとか、このような路地があって。「3丁目の夕日」という映画が最近はやりましたけれども、そのようなコミュニティが結構残されているエリアです。関東大震災、戦災を免れたエリアが多かったので、住み続けている人が多く、町会活動も活発で、町会長を筆頭に顔役の人たちは、まちを守るという意識を非常に強いです。

## ■谷中とのかかわり

昭和 61 年から 3 年間、トヨタ財団の助成を受けて、まちの親しまれる環境調査を東京芸大と谷中の人たちで行いました。そのときに、「いいところ探し」というを行いました。まずは、まちのいいところから探していこう。つつい都市計画では、問題点をまずは抽出していく発想をしていますが、まちづくりでは、マイナスな方向からはいると、陰湿なムードになることがあるので、まずは魅力・価値の発見というのですか、谷中のいいところを発見していこうということをやりましたような会でした。私は建築が専門でしたので、谷中の路地や家と路地との関係、そのようなところの魅力、暮らし方ということを当時、一番中心に置いて考えていたというところがあります。

## ■谷中の魅力 コミュニケーション

スライド 5、6：これなどは谷中の路地で、ほぼ同じぐらいの道幅と建物 2 階建ての環境ですが、全然イメージが違っているのは、見て、一目瞭然だと思います。谷中の中でもこのような路地もあって、ここはアパートが多いのですが、とても寂しい感じがします。こちらはとても楽しそうな路地ですね。あふれ出しと建築の方では言うのですが、家の前にこのように物があふれ出ていて、「共有の場にこのようなものが出ているのは汚らしい」という評価もありますが、ある一方では住民の物が置かれることによって、まちの中に住民の情報が提供されてます。例えば、この家にこのぼりが出ていることによって、ここには小さい男の子がいるのだということが分かったりとか、そのようないろいろな情報が出て、それによって人間というのは安心して町を歩けるということが起こるということが見て取れる。ここだと、誰が住んでいるのか分からない、ちょっと恐さを感じる、そのようなことが起こっています。

スライド 7、8：だんだん新しい家が閉鎖的になってきており、昔の家は非常に開放的な、まちに開かれた家だった。このようなことなども、谷中で一つ守っていきたいこととして考えています。まちへどのようにして開けるのか、開きながら、どのようにしてプライバシーを守っていくのかということを考えていく必要があります。プライバシーは守れるけれども、その分、まちとしての機能が落ちてしまっは困ります。谷中の人々が言った言葉で非常に印象的だったのが、「谷中ではプライバシーを守るためにコミュニケーションを取るのだ」という言い方をされていて、お互いに分か



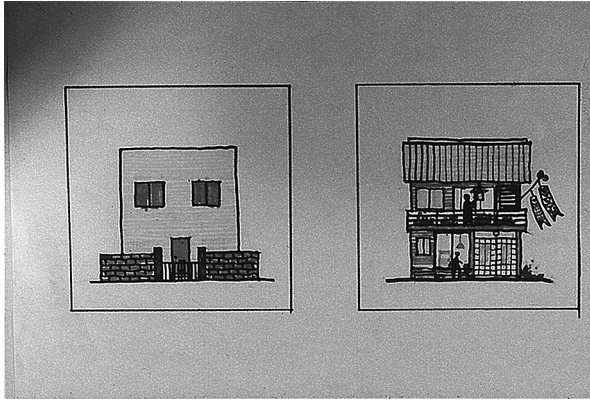
スライド 4



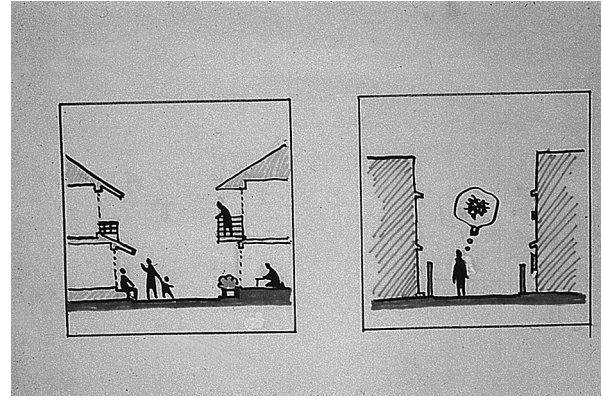
スライド 5



スライド 6



スライド7



スライド8

り合うと、察し合えるということです。だから、聞いても聞かないふりができたりとか、そのようなソフトな面でプライバシーを確保していくという考え方ですかね。だからハードで、閉ざすことによって、遮音することによってプライバシーを守るのではなくて、人間関係でプライバシーを守っていく。知っている子の声はうるさくないけれども、知らない子の声はうるさいとか、そのようなものと同じ発想だと思います。

スライド9：谷中だと、引き戸というのが結構当たり前になっていて、これが意外と大事なことがわかった。最近ではドアにどんどんなっていってしまうのですが、ドアというのは、西洋的なもので、守るための、守っている家に対して、最低限、開くというような考え方。だから、引き違いの扉だと、これは開けていても別に不思議ではないですけれども、ドアを開けっ放しにしている状態は非常に不思議な状態ですね。だから、ドアは閉まっている状態。引き戸だと、開けておいて、すだれを垂らしたりとか、のれんを垂らしたりとかすることで制御していく。だから、時として30センチぐらい開くことによって、内の様子がちょっと窺えるようにしておき、誰か訪ねてきてほしいという、そのようなサインになっているようなところもあるという話も聞きました。

私が育ったのは、横浜の新興住宅地ですが、そこでは、玄関引き戸はほとんど見かけなくて、引き戸は何か、農家のお屋敷しかないというような感じでみんなドアでした。横浜で以前調査をした時、突然、ピンポンと鳴らして行っても調査とかアンケートに応じてくれない。当たり前ですが、事前に電話でちゃんと「いついつ伺いますので」と言うと、受けてくれる人が多いのです。それが、谷中だと逆で、電話で事前にアポイントを取ろうとすると「そんなことはいいわよ」と言われ断られてしまう。しかし、突然、ガラガラごめんくださいと行くと、ボンとお菓子が出て、ご飯が出てというような感じ。地元の学生だったということもあると思いますが、そのような違いがありました。家を建替えてドアになると、インターホンが当然付き、そうすると、目的がないと気軽に行けなくなって

しまったという話も聞かれました。目的があって行っても、インターホンでピンポンと鳴らして、顔を合わせずに会話だけで終わってしまうということも多くなってしまうようなことが起こってしまう。それに対して引き戸だと、ガラガラと開けてごめんくださいというところからコミュニケーションが始まる。非常に重要だと思います。

谷中で感じるのは、このようなコミュニケーションの豊かさというのですか、まちづくりというのは、やはり人なのですね。住んでいる人がどれだけ信頼し合えるかということが非常に大きくて、それにはやはり日頃からコミュニケーションをいかに取りやすくしておくかということが非常に重要なことかと思っています。だから、日頃からコミュニケーションが取りやすい、そのような家の造り方というのが重要。意識しないと、どんどん閉鎖的な家になってしまう。実はいつのまにか、それでコミュニケーションを取ることにエネルギーがいる様になるのです。そこへんはよく考えていかないと、まちの為にと言いますか、自分の暮らしにとっても良くないことになってしまう。

横浜に住んでいて新興住宅地だったので、谷中に出会った時、これがまちだなという感じがすごくしました。そして、自分にとって、とても



スライド9



コミュニケーションの濃度というのが、合ったというのですか、それほどベタベタもしていないし、といってほっとかれもしない。風邪など引くと、1人暮らしの時は、近所の人が様子を見に来てくれるとか、「どうしたの？」というように大家さんが言ってくれたりとかということがありました。そのようなことが起こる。そこが都市的でもあると思うのです。都市の暮らし方というのですか、密集して住んでいて、お互いにうまくコミュニケーションを取って距離感をどう保つかということが結構上手になっているまちなのかなという気がします。私だと歩いていて、まちの人と会って、挨拶が結構長くて時間を食ってしまうのですけれども、谷中の人同士というのは、上手です。何気ない会話を交わしてすっといなくなってしまう。そのようなところもおもしろいと、すごいと思った記憶があります。

スライド 10、11：このような古い家ではなくて新しい家でも、これなどはある種、谷中のこのようなコミュニケーションが取れるしつらえをしている家です。ここは行き止まりの路地なので、ベンチが置かれたりとか、この新しい家でも、少し下が自由に使い、子どもたちのたまり場になっていたりするのですが。このように、古い家だけということではなくて、新しい家でも、このような工夫はできていくのだろうと思います。

## ■ 地域雑誌「谷根千」の意義

スライド 12：谷中での共同研究者に、地域雑誌『谷根千』という雑誌を出す人たちがいました。谷根千地域にとって、この『谷根千』という雑誌ができたことは非常に重要でした。以前は谷中というと、寺町、古い町というのでマイナスのイメージが強かったのです。例えば、タクシーに乗って「谷中のどこどこに行ってくれ」と言うのと嫌な顔をされたとか、そのような話が、まちの人からは聞かれると言った具合です。谷中などは寂れた古い汚いまちだというイメージをみんな持っていたところがありました。しかし、この地域雑誌『谷根千』の発刊によって、イメージが刷新されました。谷中、根津、千駄木というまちがどのようなまちなのか、そのような文化の掘り起こし、歴史の掘り起こしを一杯しました。それによって、まちの人がとても誇りを持てるようになりました。それとともに、メディアにしたことによって、他のメディア……。メディアというのは結構怠慢なところがあるので、1個メディアをちゃんと作ってくると、他がそれを引用するのです。それでどんどんどんどん広がっていくような形がある。一つしっかりしたメディアが地域の中でできると、それを引用した『ハナコ』とか『るるぶ』とか、そのような類のがどんどん入ってくるところがありました。そうすると、まちの外の人からも良いまちだと褒められる。するとまた誇りに思える。といった良い循環が生まれました。

## まちづくりグループ「谷中学校」

スライド 13：平成元年に、「谷中学校」というまちづくり組織を作りました。芸大卒業のメンバーと、あとま



スライド 10



スライド 11

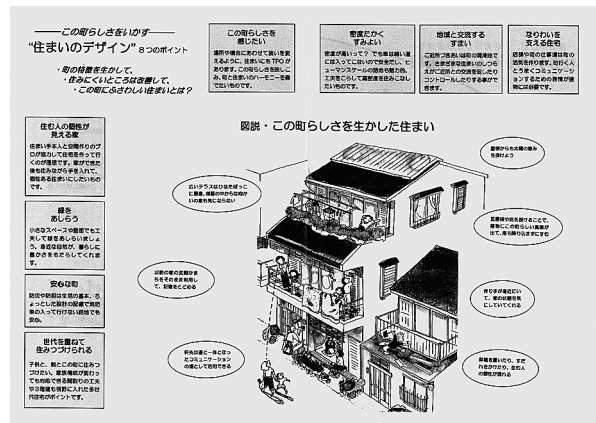


スライド 12





スライド 13



スライド 14



スライド 15

ちの人たち、まちのおすし屋さんとか郷土史家の人とか、お寺の住職さんとか、そのような人たちが混ざって「谷中学校」という組織を作りました。トヨタ財団の助成は、あくまで調査研究助成だったので、それから活動へ転換させていったという形で考えていただければと思います。

## ■「谷中学校」の活動 谷中らしい家

スライド 14：平成元年からいろいろな活動をやっています。これはその一つで、だんだん閉鎖的な家づくりになり、谷中のコミュニティを阻害しない様にと、このようなパンフレットを作っています。今の時代の流れの中で、谷中も、2階建てでは済まないで3階になって来ている。3階になるとつつい1階が寝室だったりとか車庫だったりとか、閉鎖的になってしまうことが多い。できるだけ1階は、まちと交流が持てるようにしてほしいという提案で。このときに考えたのは、やはり日頃のつきあいがしやすい家づくりというのが地域社会にとっては大事なんだとい

うことが、一つのテーマとしてありました。

スライド 15：これは実際、谷中らしい家ということをテーマに建てた家です。1階が寝室なのですがけれども、手前に書斎を設けたりとかして、まちとの交流が持ちやすい様に工夫されています。

スライド 16、17：これは昭和の初期の長屋なのですがけれども、この時代まで結構、都市型の住宅として、よ



スライド 16



スライド 17



く考えられていた事が窺えます。一番興味深いのは玄関周りです。それほど大きくない玄関ですが、このように引き違い戸が2重3重になっているのです。玄関の引き戸と真ん中の引き戸を反対側に引く事によって、風は通るけれども視線は通らないというようになっていたりとか。お客さんが来たときに、一番、ずっと帰ってほしいお客さんは、この中だけで対応して、もう少し長話するときは一畳のスペースを足してここまで。手前で閉めてしまうので中のプライバシーを守るという形を取っている。それで、もう少し長居してほしい人は右側の2畳間へ招いて、接客するという形。それも手前に両方とも戸がついているために、中での家族の、茶の間なのですけども、家族のプライバシーは守っていけるという形。接客空間をきちんととりつつ、プライバシーも確保しています。さらに、この2畳の部屋やそれに面した一坪も無い庭によって、道からの視線を遮りつつ気配を感じられたり、土や自然があることにより涼風が得られたりなど、内と外との関係が絶妙で心地よく暮らしていくための知恵がいっぱい仕込まれている家です。

## ■「谷中学校」の活動 保存と継承

スライド 18、19：このような古い家を残していきたい、谷中の魅力であるし、それがやはり誇りであるのでというので。「谷中学校」のメンバーが中心になり「たいとう歴史都市研究会」というNPO法人をつくっています。持ち主の方からNPOで借り、それをサブリースして、又貸しですか。芸大の学生が今、これに住んで貸間状態、寮生活のようなことをやっている屋敷です。1階は、お座敷があって、集会的な役割を担い使っています。活用する事によって、経済的にも成り立たせ、残していこうという活動をしています。

スライド 20：これは銭湯が廃業したときに、銭湯を舞台に演劇をやったことがきっかけとなり、現代美術のギャラリーに改装した例です。まちの記憶を残すというのですかね。この銭湯のオーナーさんは、銭湯という、まちの中での一つのコミュニティの核だった建物が、ただマンションになってしまうと申し訳ないという思いをしてくれていました。最初はマンションの1階を、何かまちの為に使えないかという相談を受けていたのですが、演劇をやったことによって、非常にこの空間がおもしろいということで建物を生かし、最終的には現代美術のギャラリーとなりました。これが、一つのきっかけとなり谷中界限につぎつぎギャラリーが生まれるという現象も起こりました。

## ■「谷中学校」の活動 自然との共生

スライド 21：これは、坪庭開拓団と言っているのですが、谷中は、比較的東京の中心部としては緑が多いところではあると思うのですが、少しの緑も大事にしていこうということではじまりました。坪庭開拓団というのは、坪庭を、小さい庭をいっぱい開拓していこうということで。これなどは行政の人がいると怒られてしまうかもしれないのですが、アスファル



スライド 18



スライド 19



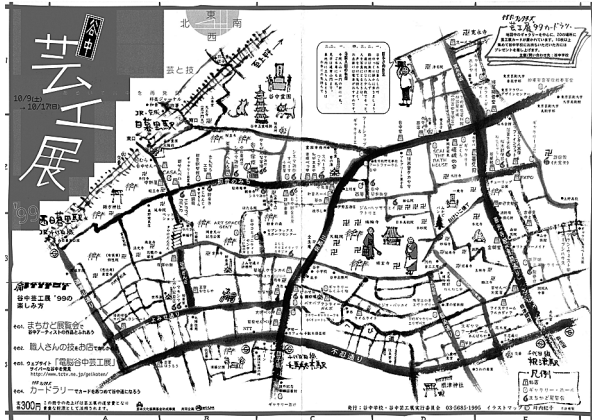
スライド 20



スライド 21

## ■「谷中学校」の活動 まちと創造

スライド 22：これは谷中芸工展というプロジェクトです。まち中を展覧会場にしようとやっているものです。まちづくり、まち興しと言ったときに、先ほどの建築系の話というのは、専門的すぎて分かりにくいし関心も少ない。ただ、まちの人が日頃からまちのことに興味を持っていかないとまちづくりはできない。谷中の人にとってまちの関心とは何だろうと考えたときに、1回ギャラリーで1カ月ぐらい、地元の人の作品の展示会をやったのです。そうしたら、みんな結構関心があって、「私のこれも展示してほしい」と持って来たりとか。芸大があるせいなのかよく分からない。江戸の文化が、そのまま引き継がれているというところもあるのですかね。小唄ができたりとか、小唄をやったりとか、そのような芸を持っている人が結構多いのです。それと絵を描かれる人も



スライド 22



スライド 23

トをコンクリートカッターで切って、それでその際のところに緑を作ってしまったのです。なるべく緑を、アスファルトではなくて、やはり土の地面を復活させたいということ。ただ、あまり全部土になると、やはり土ぼこりであったりとか、ぬかるみとかの問題があるから、このような脇のところをやればいいのか。ここには基本的に、固定の物は置いてはいけないとか、大きな木は植えてはいけないという約束にはなっていて、いざというときには消防車がこれを踏みつけてでも入って来ればいいではないかという発想です。そのようなことで、みんなが了解をしてこのような場所を作った例です。

も多いし、あと職人さんがいる町でもある。そのような手作りのものに対し、結構みんな関心があるのかなと。であれば、手作りのものを見つけ出して、それをマップに落として、まち中を展覧会場として回って行こう。手作りのもの、和菓子もそうだし、せんべいもそうだし、そのようなものも含めて考えてみよう。「芸」には、芸術とか芸能とかいう意味が入っていて、「工」というのは、これは、「手の技」という意味合いが「工」という字にはあるそうなので、それで、「芸工展」。工芸展では決してないということですね。これが今年16回目となります。今風に言うと、エコミュージアムとかいう言い方もあったりするのですが、アートフェスティバルです。あまりアートというよりも、まちの人がまちのことを再発見できるような、そのようなもの。だから、対外的にこれはやりたいわけではなくて、まちの人たちがまちを考える場をつくるという考え方です。

意外とまちに住んでいても、通勤、通学のルートは知っていても、他は知らないという人も結構いるのです。だから、この期間に、まちがどんどん変わってってしまうので、このようなお店もできたのかとか、このような人も住み始めたのかとか、いろいろとまちのことが発見できるようになってほしいということで始めたものです。

スライド 23：彫金の作家の人が、住んでいる家な



のですが、ふだんは閉鎖的になっていたのですが、芸工展を機に工房を開放してもらって、ここで小さいものを金工で作らせてもらったり、そのようなワークショップもやっています。

スライド 24：町家の一部を借りて、ここでは谷中に住んでいる工芸作家や職人さんの作品を集めたものです。ふだんは隣のおじさんだったりするのだけれども、実はすごい人だったという、そのようなことが発見できると面白いなと考え企画しました。

スライド 25：これはつくだ煮屋さんで、これも手作りの技ということで、歩くポイントにさせてもらっていて、このような芸工展という旗をぶら下げることで目印にしています。

スライド 26：これは今昔路上写真展といって、まちのその場所に昔の写真を展示しようというものです。まちというのは、どんどん変わっていく、ただ昔がどのようなだったか意外と変わってしまうと忘れてしまうのです。だから昔の写真をその場所に貼り、本当に変わってよかったのかということを確認するようなことも、必要ではという思いで行いました。

## ■「谷中学校」の活動 まちに暮らす

スライド 27：次に谷中の暮らし方についての話です。コレクティブ・ハウスという言葉聞いた事があるかたもいらっしゃるかもしれませんが、共同

してみんなで住まい合おう、暮らし合おうというので、それが普通はハウス止まりなのですけれども、谷中の場合は、まち中がみんなで助け合っているまちだろうということでコレクティブ・タウンという言い方をしています。

この冊子はその状況を調べたものをまちに発信するためにつくったものです。その結果の一つとして、お店が人と人を取りつぐ役割をはたしていることが見えてきました。谷中は高齢者が非常に多いのですが、まだ在住年数の浅い1人暮らしだったりするとなかなか誰かに頼むわけにもいかないのですが、まちとのきっかけとしてお店の人と結構仲良くなることが多い様です。お店の人に合いかぎを預けているという人がいて、その場合は、自分がかぎを忘れたときは、そのお店に行って。普通の家だと、行きづらいですけれども、お店をやっていると、割と気軽に声を掛けられるということもあってだと思います。それは、ある信頼感がないとできないですけれども。それとか、御用聞き。これは10年前の話だから御用聞きなども今は少なくなっているかと思いますが。御用聞きで具合の悪いおばあちゃんなどがい



スライド 24



スライド 25



スライド 26



スライド 27

ると、そのあと次の家に行って、「おばあちゃんが具合が悪いから、面倒を見てやってよ」ということを言って回ってくれたりとかしてくれます。そのようなお店をやっている人たちが、まちの取り次ぎ役をしてくれています。

そのようなことを言うてはいけなけれども、あまり流行っていないお店の方が、逆にお年寄りが話し相手を求めて話ができるので、そのようなお店があることはまちにとっては、いいことでもあります。同年代だったりすると、特に話がしやすかったりとかしています。そうした意味では、小売店舗というのはまちの中で大切にしていかなければいけないことだと思います。

例えば、電気屋さんでも、ポットをおばあちゃんが買いに行ったときに、その電気屋さんが「お宅だとコンセントが遠いから、こたつで使うのだったら、この延長コードも無いとだめかもしれない」というアドバイスをしているのです。そのようなのはある意味恐い話で、家の間取りがちゃんと分かっているということなのですから。ただ、秋葉原とかで買っても、そのようなアドバイスは絶対受けられません。若いうちはいいけれども、年を取ってから、そこら辺の気遣いといいますか煩わしいと感じる人もいるかもしれないけれども、ある意味大切な部分であったりする気がします。

そのようなのが現代の谷中では、まだかろうじて生きているかな。これからどうなるのかというところがある課題なのです。

## ■「谷中学校」の活動 二つのマンション問題



スライド 28

スライド 28、29：これはマンション問題からまちづくりへ発展した時の話です。三崎坂という、ちょうど谷中のだ真ん中なのですが、マンション問題が起きました。9階建てマンション計画が持ち上がったのです。まちの人たちが、谷中にあまりにもふさわしくない、谷中の景観を壊してしまうし困るということで。ライオンズマンション、大京だったのですが、当時、大京が地域共生を一つのテーマにしていたお蔭もあって、実際につくられたのは、6階で、前面の部分は4階に抑えてもらうというような形になりました。これも、まちの人たちの日常的なつきあいがしっかりしている成果だと思うのですが、その団結力はすごく良かったですね。小学校にみんなでわーっと集まって、300人ぐらいかな、住民大会を行った。マン

ション業者としては売り床面積を減らしたくないというのが当たり前です。ですので、高さを押さえる代わりに、一層部分の面積を大きくする計画を提案しました。この場合、北側に住んでいる人にとっては日当り的にはかえって悪くなってしまう。それであっても北側の人はまちの景観として低く抑えたいと言ってくれたので成り立ちました。

それで、このマンション事業主の大京も、非常に好意的にやってくれて、植栽計画などでも、谷中の雰囲気合うもの、最初はツツジだらけになっていたのですが、もうちょっと和風のものが入ったりとか、きめ細かく対応してくれました。駐車場の入り口などは、藤棚を設けることで目立たない様にしています。この他に数多く谷中にふさわしい雰囲気にする為にこちらの要望を取り入れて建設してもらいました。

この活動で一番よかったのは、最初はマンション問題として起こったので、地域と業者の対立関係になったのですが、その後は和解といえますか、地域共生でやっていくということでもっとも前向きな計画づくりが双方でできました。その為、ここに入居した人の8割が、谷中



スライド 29



の近辺の人でした。そのような地域共生型でやったマンションだということを理解して入居した人たちなので、その後も、地域とのコミュニケーションは非常によくできています。だから、町会などにもすぐ参加している。最近どこでも、新しく住む人たちが、地域活動に参加してくれないというのが非常に問題になるのですが、この場合、「ここの谷中はこのようなまちです」「このような地域共生でこのようなマンションを作りましたので是非おいで下さい」という言い方でPRしたために、それに呼応したといえますか、対応した人たちが入って来てくれたということです。谷中のまちにとっては48戸という数でも結構大きなボリュームを占めていますが、町会には、それでも非常にうまく溶け込んでくれているという状況があります。

スライド30：この2年後、すぐ近くに今度は総合地所が、ルネ上野桜木というマンションをつくりました。長谷工が窓口になったのですが、全然対応してくれず。上野公園からの正面にボーンと建つような形で、要塞的なマンションが出来上がってしまっ。これも、何というのか、デザイナーの人が変にデザインしてくれて、余計何かみっともないことになっていると評判のマンションです。

和風のイメージなのか分からないけれど、日本のなまこ壁のイメージだけを取り入れて外壁としています。和風であっても、谷中では全然ないデザインなのですけれども。とても違和感を持つデザインです。そして、何よりも巨大であり谷中のヒューマンスケールなまちからほど遠いものとなっています。

こうした中高層マンション建設に伴うトラブルは、ひとつは都市計画がきめ細かく考えられていないということです。ここでの問題点は、自分の家を建替える時、3階を建てようとしても2階になってしまったのに、なぜ隣接した敷地で14階のマンションが建ってしまうのかという単純な疑問というか怒りです。せっかく低層の環境の良い住宅地なのにそこだけが？ 法的にはクリアしている話ではあっても、なかなか心情的には納得できない、そうした問題がありました。

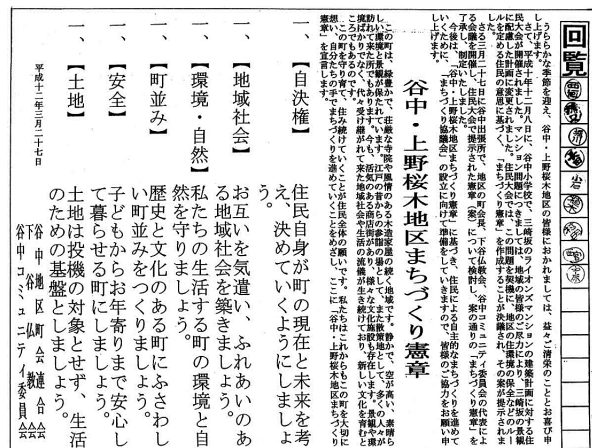


スライド30

## ■まちづくり憲章と協議会

スライド31：それで、このようなマンション問題を通じて、一つ、谷中のまちが勉強したのは、今まで不文律というのか、暗黙の了解でみんなが谷中をこのようにしていこう、このようなまちだと思っていたのが、なかなか外から入って来る人は理解してくれないというのですか、外部資本が入って来てしまうと。外の人にも谷中の考えをわかりやすく伝えようということ、このような憲章をつくりました。そして、まちづくり協議会がこのときをきっかけに作り出されました。積極的に、「谷中のまちはこのようなまちなのです」ということを言っていくという作業と、そのビジョンといいますか、谷中のまちはどのようにあったらいいかと考えていきながら、それに合った計画を、行政とともにどのようにやっていったらいいかということをする協議会を作って、今、環境部会と防災部会と交通部会と3部会に分かれて活動してます。

台東区のほうも谷中のこうしたまちづくりが非常に盛んになってきたのと呼応して、谷中のビジョン、まちづくり方針というのを、魅力の再生方針案や歴史的文化的資産の活用方針案とか、このような幾つか、谷



スライド31

中地区の整備目標を立ててやっていこうという動きになっています。

このような台東区と地域住民、町会連合会というのが一体となったまちづくり協議会ができ、その中に交通部会、環境部会、防災部会という形ができました。それから、「谷中学校というまちづくりグループを作っていた」と言いましてけれども、その延長線上に、たいとう歴史都市研究会というのと、ひとまちCDCというNPOをつくり、それと芸大や埼玉大の様々な専門分野の先生たちとも連携をしながら、やっているというようなところ です。

スライド 32：こちらは、防災部会の中で、木造密集住宅市街地整備促進事業（略称：密集事業）という事業に関連した活動を行っています。谷中2、3、5丁目は、木造密集が多いので、それを防災的にどのようにするかというところで。といって、4メートル道路とか6メートル道路で、道路と不燃化だけで防災をやるというハードだけでは、到底実現性が乏しいので、もっと、「人のくらしが町をつくる」というようなテーマで防災もソフトの面を重視しながらの立場としてやっていこうとしています。



スライド 32



スライド 33

だから、年寄り、少し若い年寄りが考えればいいのだから」という言い方をしたのです。それはすごいことだと思って、若い年寄りがちゃんといるのだという。それが年代でつながっていくから、やはりそのまちは生きていけるということがあるのだということを改めて思ったことがありました。

だから、町をやっていくうえで一番重要なのは、人がいなくなるということなのではないかという気がします。そのためには、もちろん、まちづくりの中でお年寄りのことを考えたりするのもあるのですが、やはり一番の目

スライド 33：密集事業の中で、このような防災広場というのも獲得でき、今もこれを防災センター、コミュニティ・センターと合わせてどのように活用していくかという活動をしています。

あとは、これらのマンション問題があったということもあるのですが、密集事業も入ってきたので、ひとまちCDCでは、谷中に暮らす住まいづくりの提案ということで、谷中でコーポラティブハウスという方法で暮らしを提供していきたいと考えています。コーポラティブハウスとは、一緒に暮らしたい人たちが集まって、グループを作って、それで集合住宅を作るという考え方なのです。谷中に住みたい人たちを集めて、それで谷中で土地を探して、谷中で作るという集合住宅です。ライオンズマンションは、成功しましたが、谷中と共生した集合住宅は必要です。谷中でもっと魅力的な豊かな暮らしをしたいと思っている人が集まってもらって、コーポラティブハウスを作ろうということで、人を募集して「くらす会」などを作ってやっていたりします。

少し長くなってしまいましたが、これで一応スライドのほうは終わりたいと思います。

## ■おわりに

この22年を急ぎ足で話をしてしまったので、なかなか理解しにくい部分といいますが、分かりにくい部分も多かったかと思います。まちづくりをやる上において、僕などは22年やってきて思うのは、やはり、ゆたかに暮らしていけるまちを作らなければいけないというのが一番だと思います。暮らしていけるということは、代々といいますが、人と人がつながって住んでいるということが大事なように思います。以前に「住み続けられるまちづくり」というシンポジウムを開催したときに、谷中の年配のかたが、「あなたたちのような若い人が」、まだ若かったのですが、「若い人たちが年寄りのことを考えても分かりはしないの



標とすべきことは、子供がやはり誇りを持って、一生そこのまちで暮らしてもいいと思えるようなまちをつくっていくということだと思います。子供の時代に、きちんと住んでいるまちに愛着を持っているということは、たとえ一度出て行ってもまた戻っても来るはずです。

あとはやはり、まちは人によってつくられると考えています。谷中の場合は、定住民というのが、戦前から住んでいる人たちや、今、連合町会の会長さんなどは戦後移って来て、それでも、「40年しかたっていない」という言い方をするのですけれども、そのような定住している人たちがいます。僕などは、これから40年になるのかもしれませんが、今22年目という、谷中に住み出して、そのような半定住。だから生まれ育った人と、あとは、好きで住み始めた人と。もう一つは、流民というのですか、流民という言い方は失礼か、一時住んでくれる人、学生などがそうですね。学生などは一時住んでいて出て行くという場合が多いのですけれども。そのような3層といいますか、定住・半定住・流民の三つの人たちがうまく連携できるということが非常に重要なという気がしています。本当にずっと定住している人は意外と聞いているとまちの魅力が分からないといいますが、当たり前になっているのですね。谷中の場合は、すごく魅力的なことが多いのですけれども、それが当たり前のこととなっていくから、特にはそれを大切にできない。大切にしたいのですけれども、それが脅かされてもその変化をなかなか感じられない。よそから、その魅力が良くて入って来た人にとっては、それがなくなることは、やはり非常に困ることであって、せっかくそれがいいと思って入って来ているのにということがあるので。だから、そのような人たちが、ある刺激を与え、まちの魅力とかを発見してくれる。

自分で言うのも何ですけれども、僕などは半定住民ですから、あとから入って来た人間のほうが、逆にそのまちの魅力というのが分かりやすい、価値を発見しやすいのかもしれないです。

また、谷中の良さは、僕など、あとから入って来た人間を割と受け入れてくれる土壤があるといいますが、懐が深いというのですか、自由に遊ばせてくれる。逆に、ずっと小学校のときから友達同士の関係というのは、意外と見ているとお互いに反目しあってまちづくりをやるときに、少しうまくいかないところがある様です。よそ者だからこそ、逆に自由に泳がせておいてもらえるというところがあったりして、そのあたりがおもしろい関係かなと思います。あとは谷中にとって学生が結構入り込んで来てくれることで、非常にみんな、元気になれるし、いろいろな作業ができていくということも一つの魅力かなと思います。

多分皆さんが、今日どのような興味でもって来られているのか、まだ分からない部分があるのですが、まちづくりといいますが、まちに、やはり暮らしていくということは非常に大事だと思いますし、暮らせるまちを、やはり作っていかねばいけないと思うのです。それに興味を持たれているのだと思います。谷中で今言ったような話というのは、たぶん他のエリアでも共通していえる話だと思いますので、ぜひ一つ、参考にしていただければと思います。